

の参集命令を断り、藩政優先の方針のもとに家老の島村志津摩を中心として改革政治が遂行された。小倉藩にとつては、幕長戦後の混乱から藩体制を再建することが最も優先された。島村は制産掛・制産方を設けて、藩内ですべての物を製造するように指示した。また、藩士の中から有能な人物の抜擢を行うなどを試みた。すでに八月、香春町勾金の鶴岡八幡の境内に門田栄銃隊による訓練場が設けられ、新式の銃隊訓練に力を入れるようになった。十月には、大庄屋をはじめ村役人についても百姓の投票で決める方針を布達し、十二月には家臣に対して、藩政についての意見を申し出るように触れ、同時にそれらの意見を検討するための衆議所の設置をした。

こうしたなかで、鳥羽・伏見の戦いの出兵の命令が出た。これに応じるために必要な財源を確保しなければならなかった。このために藩政の機構改革に乗り出した。今までの郡代・代官・山奉行・検見定役・郡土蔵・作事方・井樋方・炭役・蓑島在番・大橋町茶屋番その役を廃止し、かわりに郡方役所・町方役所・作事方役所・商法方役所・元方役所など、大幅な機構改革を実施した。

藩主小笠原忠忱一行が三月十二日肥後から帰ってきた。宿舎は田川郡上赤村の正福寺がであてられた。また、奥州に出兵していた藩兵たちも春の内に帰藩し、家臣たちには、四月十八日「土着」が命じられた。すなわち農業にも従事するようにさせ

られたわけである。そして、知行通・書院番以上の格の者は田川・京都・仲津の三郡に住み、組外通・組拔きの者は仲津・築城の両郡に住むように達しが出た(『田川市史』上巻 七八五～七九〇頁)。

第三節 戊辰戦争と東北出兵

一 戊辰戦争

鳥羽・伏見の戦い

慶応三年(一八六七)十月十四日、十五代将軍徳川慶喜から朝廷に大政奉還がなされた。同日、朝廷から薩摩・長州両藩に「討幕の密勅」が出されていた。この日から十二月九日の王政復古の大号令までは、次の時代の政権をめぐる息詰まる月日であった。その結果生まれた新政府は、有栖川宮熾仁親王を総裁とした議定・参与からなる三職によって構成された。この政府の最初の大きな課題は、なお多くの領地と軍事力をもっている徳川慶喜を政権から排除し、その地位と領地を取り上げることであった(辞官・納地という)。また、十月には諸藩に対し、十一月中旬に上京するよう命じたが、参集ははかばかしくなかった。政権の帰趨はどちらともいえない不安定な新政府であった。

こういった状況を大きく変えたのが、明治元年(一八六八)

一月三日旧幕府軍が、京都市郊外の鳥羽・伏見にて薩摩藩と長州藩の連合軍と戦って敗北したことであった。そして、同月六日慶喜はひそかに大坂城を脱出し、海上江戸に向かった。この戦いの結果、新政府に対する態度を決めかねていた紀伊藩や肥後藩などが新政府側についたのである。また、近畿以西の諸藩の態度も一変させ、こぞって新政府側についたのである。

この戦い以降、翌年五月北海道箱館の五稜郭が開城するまでの内乱状態を戊辰戦争といい、大きくは三つに分けることができる。鳥羽・伏見の戦いから上野彰義隊の戦い、ついで北陸戦争と東北戦争すなわち越後の長岡藩、奥羽地方の会津・荘内両藩の追討戦、そして榎本武揚が率いる旧幕府の海軍を中心とする抵抗軍との戦いとしての箱館戦争である。

新政府は諸藩に対し、一月七日徳川慶喜の追討令を出し、二月九日には有栖川宮熾仁親王^{あすがわのみやたかひと}が東征大將軍となり、新政府軍は東海・東山・北陸の三方面から進軍して三月末には江戸に集結した。徳川慶喜はその前に上野寛永寺に謹慎して戦う意志のないことを示した。ついに四月十一日に江戸城は無血開城するが、戦いを主張する旧幕府軍の中には抵抗する勢力もあった。五月十五日上野にたてこもって戦った彰義隊が敗退すると、ほぼ関東周辺は新政府軍によって平定された。そして、徳川家の跡継ぎの田安亀之助（徳川家達）が駿河府中藩七〇万石の城主になり、懸案の徳川氏の処分が決着した。ここまでが戊辰戦争

の第一段階である。

奥羽越列藩 同盟の成立 一月十七日に仙台藩に会津追討令が出されているが、仙台藩は兵を動かさなかった。そこで、

二月末に新政府は、一度決めていた奥羽鎮撫使以下の陣容を強化して臨み、総督には九条道孝^{みちたか}が任命された。鎮撫使総督軍は三月に仙台に入り、しきりに仙台藩に出兵を促したが、出兵するものの本格的な戦闘にはならなかった。むしろ会津藩と戦わず平和のうちに解決したい嘆願方法をとろうとしていたからである。四月に仙台藩領の白石^{しろいし}（現宮城県白石市）に東北諸藩重臣が集合して会議を開いた（白石列藩会議）。そして九条総督に会津藩救済の嘆願書を渡したが、受け入れられず、また、参謀世良修蔵の横暴などに、しだいに不満や不信をつのらせ、やがて五月三日に東北諸藩二五藩が同盟を結ぶにいたった。これに越後の長岡藩など六藩が加わって奥羽越列藩同盟が成立し、はじめは問題の平和的解決を基本としていたが、やがて新政府軍の攻撃を受けるにしたがって攻守軍事同盟へと変質した。

これに対し、新政府は東征大総督有栖川宮を会津征伐大総督とし、断固武力をもって東北地方を征服することに決定した（『維新史』第五巻）。つまり、白河・平潟（海岸線）・秋田・越後の四つの方面から会津藩と庄内藩征討を最終目標としたのである。

東北戦争

列藩同盟側は諸藩の力をあわせて、会津・庄内二藩を支援・抗戦態勢を整えた。これに対し、

新政府側の奥羽鎮撫使の九条道孝が陣営を仙台より盛岡に移して、六月三日に到着した。庄内方面では、副総督沢為量さわためかずが七月朔日にはつつがなく久保田に到着した。沢には「薩摩・長州・筑前・佐賀・香春の五藩兵も相合して、其の勢八百人餘」（『維新史』第五卷）が従っていた。秋田藩はこれを機会に、恭順の意志を表明して先鋒となることを誓った。そこで総督府は庄内征討諸軍の部署を定め、筑前・久保田二藩兵を新屋口に「薩州・長州・佐賀・香春四藩兵を院内口に派遣」（『維新史』第五卷）することを決め、秋田を七月六日に出発した。

東征大総督・会津征伐大総督有栖川宮熾仁親王の下に、総督府参謀を設置し、その参謀補助に板垣退助（土佐藩）・伊地知正治（薩摩藩）が任命された。大総督府の会津討伐作戦は、まず仙台・米沢藩などの諸藩を討って、会津を孤立無援の状態に陥れて降伏させる方針であった。しかし、板垣は七月二十六日白河口の官軍を率いて棚倉を攻略、渡辺清左衛門は平潟口の官軍を率いて磐城平へ進発した。こうして、七月二十九日には二本松城が官軍の手に落ちた。また、板垣は迂回作戦をとらず、八月十九日直接会津討伐の方針を貫いていた。

板垣退助らは二本松に駐留していた薩摩・長州・土佐・大垣・大村・佐土原の六藩兵をひきいて若松城をめざして進軍し

た。八月二十二日、猪苗代湖畔の要衝猪苗代に迫った官軍に、会津藩兵は抵抗する間もなく敗走した。これより官軍は競って若松城下をめざした。

北越地方で、新政府軍と長岡藩を中心とする同盟軍側の激しい戦闘が続いていた。しかし、七月二十九日には新潟は新政府軍に占領され、長岡城も新政府軍の手に落ち、同盟軍は敗走し、越後は新政府軍により制圧された。

その後、八月末に米沢藩が、九月十五日に仙台藩が政府軍に降伏し、会津藩は全く孤立してしまった。ついに九月二十二日、会津藩の抵抗は終わり、無条件降伏した。東北戦争における庄内藩兵と新政府軍との戦闘は庄内藩の優勢な情勢で展開されたが、八月末の米沢藩の降伏によって逆転し、九月十六日から退却に転じた。二十四日南部藩が政府軍に降伏したので、二十七日、最後まで頑強に抵抗していた庄内藩が降伏した。こうして東北戦争は終わった。

慶応四年（一八六八）八月十九日夜、旧幕府の海軍副総裁であった榎本武揚の率いる開陽丸以下八隻の徳川軍艦隊が品川沖を出航した。新政府軍は明治二年五月十一日を総攻撃日と定めて、函館攻略にかかり、十八日には榎本軍が降伏し、戊辰戦争は終結した（『維新史』第五卷）。この結果、全国統一政権が誕生したのである。